
忍法夜話／巫女狩り

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍法夜話／巫女狩り

【Zコード】

Z9219D

【作者名】

つきてつぐす

【あらすじ】

戦国の世。自国の命運をかけた諜報戦は、いつしか血ミドロの忍
術合戦となつていった。ハッキリ言つて血まみれです。飛び散り
ます。スプラッターです。でも、ちよつぱりエロいので15歳以上
の方のみお読み下さい。

第一夜（前書き）

お読みになられる前に

この小説のテーマは『血みどりの人口』です。よって、かなり残酷な描写をしております。苦手な方は、どうぞご注意ください。なお15歳以上の方のみお読みくださいとのお願い致します。

第一夜

白い月は神々し……
赤い月は禍々し……

今宵、漆黒の中天に浮かぶ満月は、狂人の充血した目に似て赤かつた。

その凶月から放たれる毒々しい光は、仙石原の荒野に点在する立ち枯れた木々の陰影を色濃く浮き立たせ、朧^{おぼろ}な景観によく立体感を持たせている。天地を分かつ神山の黒い輪郭^{かたくわ}は、果てしもなく遠く高くそびえ、現世から黄泉へと続く道を頑^{かたくな}に遮っていた……。

けえん……

妖しく狂い咲く月夜に何を想つてか、狐が一匹、声高く哭くと、その銀色に輝く毛並みを輝かせて荒野を跳ねた。そして暫くするとその姿はふつりと消え、後には鬼火が一つ、夢^{はかな}げに漂っているのであつた……。

しきりに風が吹いていた。

石を投げ入れた水面の様に、群生する薄^{すすき}が揺れてい。生温い、しかしやがて訪れるであろう厳^{はる}しい冬の予感を孕^{はら}んだ、寂しい秋の夜風である。どこか遠くの林で、梟^{ふくろう}の啼く聲^{せい}がした。それは、諦觀^{ていかん}に満ちた物悲しい聲であった……。

闇^{くろ}が何かを押し包んでいる……。

薄の原に横たわる人だ。

満月が一つの女体を照らしていた。全身で月光を浴びる若い女性の生々しい裸体を、秋の虫の合奏が押し包んでいた。二つの乳房が、真直ぐ天を指し示している。

ボロン……

闇に横たわる動かない女体は、艶めいて美しかつたが、残念な事に首から上が無かつた……。

ボロン、ボロン、ボロン……

その首無し女を、三つの黒い影が取り囲んでいる。

オン キリキリ バザラ ウン ハッタ……

そのうちの一人、腰まである総髪と長いあご鬚を風になびかせ、鷹の様に鋭い目をした山伏姿の男が、黒い塊を両手で高々と月に掲げた。この女の首である。かつては綺麗に結われていたであろう艶やかな黒髪は、首から滴り落ちる凝固しかかつた血と一緒に、無惨にも地に向かつて長く垂れていた。

かつと見開かれた女の両目は、己が死の直前に一体どんな恐怖を垣間見たのか……。

オン バラ バラ サンバラ サンバラ……

高価な壺でも扱う様に、女の生首を大切そうに抱えていた総髪の山伏が、くるりと女の死顔を自分の方に向けると、その紫色の唇にゅつくりと口の口を近付けた。

インダリヤ ビシュダネイ ウン ウン ロロ シャレイ ソワ

力……

総髪の山伏が、囁く様に唱える陀羅尼だらにが次第にくぐもつてくると同時に、この男の口からもぞもぞと奇怪な蟲が這い出してきて、ゆっくりと女の口に移り、その血の氣の引いた唇を押し広げ、口内へと分け入った。

見るからに禍々しい蟲が、女の口中に完全に飲み込まれると、それまで恐怖に見開かれていた死顔の臉がゆっくりと閉じられ、次第に恍惚の表情へと変わつていった……。

「ううううん……」

女の首が艶かしく唸つた。薄桃色の舌がちろちろと脣を舐めます。山伏は、満足そうにふふふと笑つた。

「どうじゃ、松虫よ……」

総髪の山伏が女の首に嬉しそうに呼び掛けると、女の目がかっと見開かれ、山伏と目が合つと、にいつと口の端を釣り上げて笑つた。

「どうか、どうか。気に入つたか……」

総髪の山伏は、慈しむ様に女の髪を撫でた。

「この女、とうとう最後まで何も喋らなんだが……」

別の山伏姿の男が吐き捨てる様に言つた。剃髪した大男である。彼が持つ薙刀なぎなたの刀身は、赤黒い血糊でべつとりと汚れていた。

「えええ、間違いねえつて……。この女は、他国から来た間者だよ」

残る一人の小柄な山伏が、舌舐めずりしながら女の首無し屍体を見て笑つた。毛むくじやらの顔に異様に光る大きな目だけが、きょろきょろとせわしなく動いている。

「きさきつ、惜しいなあ。おめえが癪癩を起こして、この女の首を刎ねたりしなけりや……」

「ふん、ほざいてろ」

「へへ……。おめえは短氣でいけねえや。なにかつちゅうと、す一ぐ得物を振り回しやがる」

「黙れ、申阿彌さるあみっ！」

「頭に血が上った時は、まず、ゆつくつ十数えるこつた」「ええい黙らんか、こいつめ！」

たちまち禿頭にミニミニズの様な血管を浮き上がらせた大兵の山伏が、持つていた薙刀をふうんと振り回すと、申阿彌は、軽業師の様にひよいひよいと跳躍してこれを躱し、きさきつと甲高い声で笑つた。

「大禿おおかむのよつ……。女の首は刎ねられようが、この申阿彌様にはかすりもせんぞ」

「小賢しいチビ猿めえ！」

薙刀を構え直した大禿と彼を挑発する申阿彌を、女の首を抱えた総髪の山伏が一喝した。

「いい加減にせい！」

申阿彌がびくっと肩をすくめ、大きな目をぎょろつかせる。大禿は、薙刀を引いて頭を垂れた……。

「おぬし達、遊んでおる場合ではないぞ。この女の素性は、おおよそ見当がついておるのじや」

「申し訳ない、お頭……」

「……まあよい。この女が何処の手の者か判れば、お前達には直ぐに働いてもらひ」

申阿彌と大禿は、お頭の両隣りに肩を並べ、女の顔を正面からしげしげと覗き込んだ。

「どうじや、松虫？」

お頭が、再び女の顔に向かって、にっこり笑いかけると、土氣色の女の唇はゆづくりと語り始めた。

「ここの女の名は桔梗といつて、甲斐から来た歩き巫女じや……」綺麗な顔からは想像もつかない、がらがら声であった。首から下が無いのだから仕方が無い。時折、口から血の泡が飛ぶ。

「うーむ……、やはり甲斐のくノ一か」

「左様……。裏で指図しておるのは、真田安房守といつ事じや」

真田安房守とは、武田の猛将真田昌幸の事である。三人の顔から笑みが消えた。いつしか赤い月は霞み、ねつとりとした黒雲が夜空を覆い始めていた……。

「しかしなあ……。甲斐の歩き巫女が、何の為に我々を付け回していたんだ？」

申阿彌が身を乗り出して訪ねる。

「さあ……、そこまでは解らん」

女の首は、色っぽい流し田を申阿彌にぐれながら舌舐めずりをした。申阿彌が頭髪を逆立てる。

「ひとつ気になる事がある……」

お頭が峻厳な目をして言つた。

「昨年、武田軍が上洛の途上で引き上げた、あの不可解な動きじや

……」

「確かに、あれはおかしいな。一言坂、三方ヶ原と遠江を飲み込み、

家康の城をこじごとく攻め落としておきながら、じりじりして急に引き返す必要があつたんだ？」

申阿彌が上田遣いで女の首を見た。女の目がふいとそっぽを向く。申阿彌は、べつと唾を吐いた……。

「……やはり、信玄が病んでいると嘗つて尊は本当なのだ」

大禿が、いよいよ強くなつてきた風に目を細めながら言った。「しかも、病状はかなり重いと見る……」

お頭の目がぎらついた。

「いや……、事によると、これは……」

三人は、振り仰いだ黒雲に雷光を見た。宵闇に瞬いた青白い閃光が、雲間に鬱々とそびえる峻険な神山の黒い輪郭を、三人の目にくつきりと焼きつけた。

「我らが御屋形様にも、じつやぢ運が向いてきたよつじや……」「お頭の、うわ言の様な咳きが雷鳴と重なつた。

風が強くなり、流れの速くなつた黒雲に時折月が吸い込まれる。何処から集まつたのか、血の匂いを嗅ぎ付けた野犬どもの金色に輝く目が、遠巻きに山伏達の様子をうかがつているのが見え隠れする……。

「なあ……。この女、もつ喰つてもいいかな？」
女の首が、目をきらきら輝かせながら訊ねた。

「まあ、待て……」

総髪を風になびかせ、お頭はそれを制する。
「今一つ……。」の女の仲間は、あと何人ある?」

女の首がにいつと笑った。

「四人じゃ……」

お頭が申阿彌と大禿を見る。一人は、静かに頷いた。

「なあ、喰つてもいいじゃろ。なあ……」

女の首は、子供のように駄々をこねた。お頭は、目を細めにいつこり笑つた。

「待たせて悪かつたのう、松虫や……。わあさ、存分にお食べ」「おお、そつか！」

女の表情がぱっと輝いた。

そして、瞳がくるつと裏返ると、だらしなく口を半開きにしたまま表情が固まつた。次いで、ぐちゃぐちゃと糠味噌ぬかみそを搔き回す様な湿つた嫌な音が、女の生首の内から聞こえ始めると、申阿彌、大禿の両名がそろつて顔をしかめた。

「お頭あ……。よくなん気持ちの悪いもの、腹ん中で飼つてるなあ……」

「ふふふ……、そう言つな。いざとなれば、一匹で兵百人に匹敵する働きをするのじやぞ」

やがて氣味の悪い音が止むと、白目を剥いた女のだらしなく開いた口元から血の混じつた涎が糸を引いて垂れ、次いで赤黒く血に濡れた節足動物がもぞもぞと這い出してきた。

「どうじゃ、旨かつたか？」

お頭の問いかけに、女の口からうねうねと突き出た妖虫は、ぎいと哭いて答えた。

「ほつか、ほつか……」

そう言いながらお頭は、大きく開けた口から舌を突き出し、血に

濡れた妖虫を迎えるべく顔を近付けた。たちまち蟲がお頭の口中へぞろりと滑り込む。

「うえ……」

たまらず申阿彌が、気持ち悪いといったふうに胸を搔きむしった。

蟲を飲み下したお頭は、血の付いた口髭をべろりとなめながら言った。

「よいか、申阿彌に大禿よ。是が非でも、この相模に忍び入つたくノ一どもを捕らえ、信玄坊主の生死を確かめねばならぬ。二人とも重々心してかかれよ」

「承知しました」

両名は、恭しく一礼した。

次の瞬間、お頭は、それまで大事に抱えていた女の首を無造作に宙へ放つた。刹那、大禿の薙刀がぶうんと唸り、がつと鈍い音がして女の生首が見事に二つに割れた。

地へ転がった女の首の残骸は、頭蓋ずがいの中身が空っぽだった……。

「しばらくは、何も食わせなくてよいな……」

お頭は、鷹の様に怜俐な瞳を細め、残酷な表情でせせら笑った。

この男。

猪鼻岳一帯を根城とする相州乱波、風魔一党の頭領で香林坊といつた。今は、四代目、風魔小太郎を名乗っている。

立ち去る三人の影が、やがて宵の闇と一体になると、それが合図のように、お預けをくらつていた野犬の群れが息荒く這い寄つてきて、女の屍骸を食いつ始めた。

一度目の雷鳴が、青白い閃光にやや遅れて轟くと、たちまち針の
よつに鋭い雨が降りそそぎ、忌わしい殺戮の現場を静かに洗い流し
始めた……。

続く。

第一夜（後書き）

春工口ス2008年リベンジしようと思つて作りました。何話まで書くか決めていませんが、全話血まみれにしようと思つています。お読み頂く前に、お食事を済ませられますよう、お願い致します。

第一夜（前書き）

お読み頂く前に。

この作品は、『春工ロス2008』の企画に出品するためには書かれたもので、15歳以上の方は、閲覧出来ない事になつております。あらかじめご了承下さい。

第一夜

秋の空高く、鳶^{とび}が幾何学模様を描く。

焼烟の煙が、紺色の空に一直線に吸い込まれていった……。

足柄峠の稜線は、すでに緑から黄色に移り変わり始めていた。もうすぐ山は、一面紅葉の錦に彩られる。

そよ風は土の匂いを運び、肥沃な足柄平野は、去年と変わらず豊作の喜びに沸いていた……。

名君と言われた北条家三代氏康は、三年前すでに世を去っていた。当代の氏政は、何かにつけ凡庸な人物ではあったが、それでも手堅く北条の三つ鱗^{さんじゆん}を守り続け、その治世は、今や爛熟期を迎えようとしていた。

ただ、広く世を見渡せば、群雄割拠、下克上の時代が連綿と繰り返されている。親を殺し、子を流し、娘を貢ぎ、同胞を裏切る。それらはすでに世の傲いとなっていた。

戦乱の火種は、常にどこかで燃^{くすぶ}り続けている……。

ひとたび戦ともなれば、人も、家も、田畠も、生活も、全てが馬蹄に踏みにじられる事になる。

血生臭い時代であったのだ……。

若い女の嬌声が聞こえる……。

狩川の急流に素足を洗わせている娘がいた。

薄い藍色の着物を腿までたくし上げて腰紐で結び、白い足を冷たい水に浸けながら、身体を折り曲げてさかんに汚れを手で洗い落としている。終始、白い歯を見せて笑っていた。

「相模の男は、だらしないねえ……。私がちょっと締め上げたら、ひいひい女みたいな声で哭きやがつた」

「ええっ！ あの毛深い猪首がかい？」

もう一人の、白装束に手甲脚絆といつ巡礼姿をした娘が、錫杖しゃくじょうで近くの草原を指した。そこには、血の氣のない裸の男が目を剥いて仰向あおむけけに転がっていた……。

「ありやあ、下忍だつたよ」

「じゃあ、何も収穫は無かつたんだね？」

「ああ……。甲斐には興味無いつてさ……」

「下忍は、哀れなもんだねえ……。使い捨ての道具だから、世の中の事なんか何も知っちゃあいない」

足を洗っている娘は、からからと小気味よく笑った。

「いいじゃないか。地獄へ墮ちる前に、極楽へ行かしてやつたんだから」

白装束の娘は、不意に真顔になつて言つた。

「ねえ、千鳥……。桔梗は、どうして来ないんだろう？ 今まで、遅参した事なんて無かつたのにさ……」

千鳥も黙り込んだ……。

川のせせらぎと、小鳥の囀りだけが耳に届く。狩川は、やがて酒匂川と合流し相模湾へと注ぐ。瑠璃色の糸トンボが視界を横切った……。

「水鳥じやあるまいし……、いつまで行水してんかい？」

野良着を着た娘が近づいてきた。手拭いを姉さん被りにしている。

「だつて、あの男の匂いを取らなければ、次の客が寄つて来ないだろ？」

そう言つて千鳥は、着物の裾を腰まで捲り、下半身を全て川面より沈めた……。

「きやあ、冷たい！」

白装束の娘が、溜息交じりに言つ。

「ねえ、菖蒲あやめ……。桔梗は、どうして来ないんだろ？」

菖蒲は、被つていた手拭いで白い頃の汗を拭つた。

「あの娘こが戻らないと困るねえ……。一番、重要な仕事を任せてあるんだから」

鳶が鳴く。

不意に、絹を裂く様な悲鳴が走つた。

千鳥が、河原の小石を蹴散らしながら転げ回つている。他の一人が慌てて駆け寄つた。

「どうした、千鳥！？」

「ひいつ！ わ……私の中に何かいる……。助けて……ひいいつ」脂汗を額に滲ませた千鳥が下腹部を押さえ、身体をくの字にまげて苦悶している。どう見ても尋常な様子ではなかつた……。

「お願い、双葉ふたば！ 浮穴媛うきあなひめ様を呼んできてくれ

「はい」

白装束の双葉が去ると、菖蒲は千鳥の肩を抱き起こし、彼女の顔の汗を拭きながら声を掛けた。

「がんばれ、千鳥！ 今、助けてやるから……、もつ少しの辛抱だ」

しかし千鳥は、狂つたように臍の下の辺りを搔きむしった。

「ここにいー！　ここに何かいるー！」

恐怖に田を大きく見開き喚き散らす。引っ搔いた下腹の皮膚が裂け、血が滲んだ……。

「千鳥つ！？　しつかりしる、千鳥！」

「い、い、い、痛、痛い、痛いいいいつ！」

きええええええつ！

千鳥は怪鳥の如く吼えると身体を『』なりに反らし、激しく痙攣したまま泡を吹いて動かなくなつた。

「千鳥……、千鳥！」

そこへ双葉が駆け戻ってきた。

「千鳥は？」

「駄目だ！　浮穴媛様は！？」

「今、来るわ」

その時、千鳥が菖蒲の手を振りほどいて、すりくと立ち上がつた。

「え……千鳥……？」

呆然と見守る一人には見向きもせず、千鳥は田を吊り上げ、大声で笑い出した。

「ははははーっ！　やはり、そうであつたかつ。信玄入道はすでに
身罷みまかつたかあ！」

本人のものとは思えぬ、がらがら声で嬉々として喋つた。

「これはよい！　直ちに御報告いたさねばっ」

「ちょっと……、一体どうしちゃつたんだ、千鳥……？」

心配して歩み寄りうつする一人を、鈴のよつに凜とした声が制した。

「そこを、どきやれ！」

小石を蹴つて駆けて来るのは、緋袴の上に千早せんぱを着た巫女姿の娘であった。

彼女は、被つていた被衣かつぎをふわりと投げ捨てると朱鞘の懷剣を引き抜き、疾風の如く二人の間をすり抜けた。

「媛様、何をつ！？」

「ぐはああつ」

菖蒲と双葉が叫んだ時には、懷剣が柄の部分まで深々と千鳥の胸に突き入れられていた。

「おのれえ……甲斐かいのくノー……」

千鳥は、一瞬、浮穴媛に掴み掛かつたが、直ぐに体の力を失い河原の上にぐしゃりと崩れ落ちた。

「千鳥！？」

浮穴媛は、静かに言つた。

「蟲に入られておつた……。どのみち助からん」

浮穴媛が千鳥の胸から懷剣を引き抜くと、血が勢いよく飛び散つた……。

「千鳥一つ」

「待つ！」

千鳥の亡骸に駆け寄ろうとする菖蒲と双葉を、浮穴媛の凜とした声が制した。二人は、金縛りにあつたように立ち止まる。浮穴媛は、しゃがみ込んで千鳥の恐怖に見開かれた目をそつと閉じさせた……。

「この蟲に、我らが秘事を聞かれてしまつたなあ……」「媛様……。な、何をなさるのです？」

浮穴媛は、仰向けに寝かせた千鳥の帯を解いた。次に着物の合わせ田を開くと、白く美しい女の裸身が秋の陽射しに照らし出された……。

「蟲を殺さねばならぬのじや」

浮穴媛は血濡れた懷劍を、躊躇たまひりいもなく千鳥の臍へその下に突き立てる。血飛沫が彼女の美しい顔を汚すが、それを気にもせず、差し入れた懷劍を一気に引き下ろした。

たまらず、菖蒲と双葉が手で顔を覆つ。

裂かれた双葉の腹から、赤黒い節足動物がもぞもぞと這い出してきた……。

ぎい

蟲はぐぐもつた声で呪くと、千鳥の腹からぞろりと抜け出し、川の方へ向かって這い出した。

「逃がすか！」

浮穴媛が蟲に飛び掛かり、懷劍で赤黒い体ごと地中まで一気に貫いた。

ぎいいいいい……

うねうねと悶え苦しむ蟲を見下ろしながら、浮穴媛は、ゆっくりと立ち上がった……。

「こいつは、刀剣では殺せぬのじや……」

彼女は、おもむろに印を結ぶと、厳かに不動尊大咒を唱え始めた。

オン サラバタタギヤテイビヤク サラバボッケイビヤク……

真言を唱えるこつれ、蟲の体からびすぶすと煙が立ち上る。髪の毛の焦げたような嫌な臭いが鼻をついた……。

ケン ギヤキギヤキ サラバビキンナン ウン タラタ
カン マン

真言が終わると同時に蟲から勢いよく炎が上がり、ぱちぱちと弾ける音に包まれ、その体は次第に黒く不自然な形に歪んでいった……。

浮穴媛は、ふうと溜息をついた……。

「……千鳥も焼くか？」

彼女の問いに、菖蒲と双葉は力なく首を振った……。

「そうか……。では、ここに埋めてやろう」

そう言つて、千鳥の乱れた着物を直した。

「この蟲は、人の体に入り込みその者の意志を操るのじゃ。一度入つたら取り出す事は出来ぬ……」

「密かに川の中で、我らの体に侵入する機会を窺つていたのですね

……」

「そうじや……。」いっぽは、普通口から入るが女の場合は陰部からも入る……。お前達も気を付ける事だ」

「風魔一党の仕業でしょつか？」

「それは間違いないが……。しかし、あの口ぶりでは、どうやらまだ大殿の死を知らんようじやな……」

浮穴媛は、首を捻つた……。

甲斐の国主、武田信玄は、戦国の諜報戦を勝ち抜く為に素破と呼ばれる隠密組織を使っていた。それと同時に、身寄りのない少女達

を集め忍びの訓練を施し『歩き巫女』と称するくノ一集団に仕立て上げていた。彼女達は、口寄や神楽舞などをしながら諸国を巡礼し、同時に密命を受けて諜報活動にも従事したのである。

今回、浮穴媛達五人の歩き巫女が、武田の智将真田昌幸から受けた使命は、北条氏政が信玄の死についてどれくらいの情報を持っているかを探る事だった。その為に彼女達は、まず、相模の乱波風魔一党に探りをいれたのである……。

「浮穴媛様……。もしや、桔梗も……？」

双葉の問いに、浮穴媛は表情を変えずに言った。

「……恐らくはな」

彼女の能面のよう無表情な目が、焼けただれた蟲の死骸を見た。

「蟲術を使うとは、忌々しい奴らじや……」

そう言つて、死骸をじりじりと踏みにじつた。

浮穴媛は、懐から檀紙だんし一枚取り出した。

「そうじや。ひとつ、返礼をしてやろう」

そう言つて紙を折り始めた……。

「媛様、それは、神折符かみおりふですね？」

菖蒲が聞く。浮穴媛は、無言でうなずいた。

「神折符とは何ですか？」

浮穴媛は、ちらと双葉を見た。

「そうか、双葉は知らんのだな……」

折りあがった檀紙を双葉に見せた。それは、難しい折り目で不思議な形に折られていた……。

「これが太古真法の神折符じゃ。折り、包み、結ぶ事によつて神靈と通感する古神道の秘術じや」

双葉が不思議そうに見つめる中、浮穴媛は神折符を手の平にのせ

高々と天にかざした。

「折りとは、天降り……すなわち天意の降下……
神折符が、まばゆい光を放ち始める。」

「包みとは、実相……すなわち真・善・美の三徳……」
神々しい光に包まれた神折符は、ゆっくりとその形を変え、やがて一匹の蝶の姿になつた。

「結びとは、産靈^{むすび}……すなわち高御産靈神、神産靈神の一柱の神力……」

次の瞬間、手の上の光輝く蝶は、ひらひらと秋空に舞い上がつた。
菖蒲と双葉は思わず息を呑んだ……。

「ふふふ……。これで、蟲の飼い主がどこにいるか直ぐに分かる」
浮穴媛は、目を細め天を仰いだ。金色の蝶がひらひらと視界から遠ざかる。

「鳴かねば撃たずには済ませたものを……」

天女と見紛う浮穴媛の美しい顔が狂気に歪んだ。
「見ておれよ、北条の乱波ども……」

血で汚れた顔が次第に恍惚の表情へと変わり始め、黒い髪の毛がざわざわと逆立つた……。

「風魔一党に我らが恐ろしさ思い知らせてくれる! 相模の天地を哀れな贋^{にえ}の血で染めてくれようぞ。ははははーっ!」

天を貫く笑い声が、晴れ渡つた足柄山の縁に凜と木霊した……。

続
く。

第一夜（後書き）

全3話の予定でしたが、次号で終わらせるのが困難になりました。
5話くらいで終わりたいと思つてますので、よろしければ最後まで
お付き合い下さい。

第三夜（前書き）

ご注意

R - 15 作品です。

第三夜

廃寺がある。

茫々たる草木に覆われ、風雨に晒され半ば朽ち果てた壁には、赤黒いやモリが這い回っている。
主を失つて久しい古寺には、餽えたような死の臭いだけが取り残されていた……。

しゃん

暮れきらぬ秋空に夕星ゆきせいが輝いてゐる。

凶事おこひの兆しやうしだ……。

足柄坂の裾野で鹿追いの火が三つ四つ……、まるで狐火のようこ僂く揺れていた。

逢魔おほまが時とは、すなわち大禍おこひ時……。

朧おぼろな夕景は、もはや天女と鬼女の見分けもつかぬほど闇に浸ひたされていた。

しゃん

虫の聲に重なつて鈴を振る音が聞こえる。

夕闇に溶け込むよううに、崩れかけた楼門の脇に巫女みめが立つてゐた。市女笠いちめがさの前を上げ、じつと闇を睨んでゐる。その手には、稻穂いなほを形どつた神樂鈴が握られていた。

金色の蝶が、巫女の頭上をひらひら舞つてゐる。あたかも、彼女

が振る妖しい鈴の音に操られているかのように……。

しゃん

鈴の音が止む。

それが合図のように巫女の側らに人影がうずくまつた……。

「菖蒲か……？」
あやめ

「……はい」

人影が静かに答える。若い女の声だ。

「双葉もおります……」
ふたば

影は、一いつになつっていた。

「跡を尾行られてはいまいな？」
つけ

「大丈夫です」

「そうか……。では、聞かせよ」

「はい」

菖蒲と呼ばれた方の娘が顔を上げた。彼女は、長い髪を後ろで束ね百姓の娘に扮していた。

「浮穴媛様のお指図通り、小田原の城兵を籠絡して聞き込みましたが、戦支度のための下知は未だ下されていないようです……。念のため兵糧倉も検めましたが、備蓄は充分なれど、新たに運び込まれた様子はありません……」

菖蒲の淡々とした報告を、浮穴媛と呼ばれた巫女は、ただ黙つて聞いている。

「遠山、大道寺、梶原、猪俣など各将の郎党にも同じように探しを入れましたが、これと言つて変わった話は聞けませんでした」

「そりが……、もし、拳銃するなら、収穫を終えたばかりの今が最適なのが……」

「そうですね……、冬になつてしまえば、峠を越すのが至難でありますよう」

「やはり北条氏政は、大殿の死を知らぬな……。知つておれば、いかに戦下手の氏政と言えども、この千載一遇の機会を逃すわけがない」

「…………恐らくは、媛様のご推察通りでしょう」

浮穴媛は、京人形のように雅みやびで可憐な顔を、少々険しくして二人に言った。

「大殿のご遺言で、我らは、その死を三年のあいだ秘さねばならぬのじゃ……。今はまだ、他の国に戦など仕掛けられては困るのでな……」

「はい……。真田の殿も、同じような事を仰せられました」

「ただ……」

双葉と名乗つた方の娘が後を続けた。

「城と風間谷の間で、早馬が一度ばかり往復しました……」

「ほつ……」

浮穴媛の切れ長の目が、じろりと双葉を見下ろす。

「して、その者は捕らえたか？」

「…………いえ」

双葉が顔を上げる。

「凄まじい妖氣を発しておりました故ゆえ……」

「ふん……」

浮穴媛が鼻で笑つた。

「それは、恐らく風魔小太郎であろう」

ひらひらと舞う金色の蝶が、浮穴媛の手に留まつた。蝶は、たちまち複雑に折られた紙片と化した……。

「まあよい……とにかく、奴らがここで毎夜連絡を取つてゐる事は分かつておるのじや」

菖蒲と双葉が目を輝かせる……。

「千鳥と桔梗の仇が討てまするな」

「ふふふ……」

浮穴媛は、闇にひつそりとたたずむ伽藍がりんの黒い輪郭を見上げた。
「じゃが、皆殺しにする前に奴らの存念だけは、是非にも聞いておかねばなるまい……」

菖蒲が立ち上がつた。

「私が、あの寺の中に潜んでおりましょう」

「いや、お前では駄目だ。桔梗ききょうの木隠れさえも見破られたのじや。すぐに見つかってしまう……」

浮穴媛の冷酷な目が双葉を見た。

「双葉よ……。この仕事は、お前にしか出来ぬぞ

「…………はい」

白装束を着た巡礼姿の双葉は、手にしていた錫杖しゃくじょうを側らに置くと、目を伏せたままゆっくりと立ち上がつた。微かに憂いをおびたような彼女の相貌は、十三夜の月のように青白く美しかつた……。

やがて、彼女は長い睫毛を伏せ、やや恥じらいながら着てゐる物を一枚ずつ脱ぎ始めた……。

薄闇の中、微かな衣擦れの音が耳に届く……。

その姿を表情のない瞳で眺めていた浮穴媛が、独り言のよつと言つた。

「人が、己の気配を完全に消す事は難しい……。たとえ呼吸まで止めたとしても、鼓動は鳴り続け、血は脈打つ……。さすがに、自分の命までは消せぬからな……」

「我らの幻法を破るほどの通力を持つた者が、風魔一党にいたとは驚きです……」

菖蒲が溜息交じりに言つ。

「桔梗には、可哀相な事をした……。妾は風魔小太郎という男の力を見くびつておったわ」

浮穴媛がそう言い終えた頃には、双葉は、一糸まとわぬ裸身となつていた……。

匂い立つような双葉の白い裸体は、艶めかしさの中にせも、やはり狐貉こがくのごとき妖しさを滲ませていた。

やがて双葉は、両足を僅かに開くと印を結んで一心に咒じゆを唱え始めた……。

オン キリク ギヤク ウン ソワカ……
オン ギヤク ギヤク ウン ソワカ……

陰に籠もつたような陀羅尼だらにの詠唱が始まると、たちまち双葉の股間から尿がほとばしつた。

尿は、彼女の白い腿ももを濡らしながら勢いよく地へ垂れ、びちゃびちゃと跳ねながら足下に生温かい水溜まりをつくつた……。

オン キリク ギヤク ウン ソワカ……
オン ギヤク ギヤク ウン ソワカ……

双葉の尿は、延々と流れ続け、やがて彼女の肉体に変化が現れた始めた……。

豊満な肢体は徐々に萎み、いつしかその質感を失い干からびてゆく。白くたおやかな肌には次第に深い皺しわが刻まれ、もはや木乃伊の様相を呈していた……。

オン キリク ギヤク…… ウン…… ソワカ……

唱える呪が徐々にくぐもり始め、やがて途切れ途切れとなつた頃には、双葉は骨と皮だけの枯れ木のような体になつていた。それは、もはや人ではなく物であった。

ただ、長い黒髪だけが艶やかに風に揺れていた……。

「美事じゃ……」

浮穴媛の呟きに菖蒲もつなずく。

「」の姿なれば、もはや人の気配など微塵も感じられまい

そう言って浮穴媛は、木乃伊となつた双葉の枯れ木のような体を草の上に横たえると、ぼきぼきと乾いた嫌な音をさせて関節を外し、四肢をたたみ始めた……。

「双葉よ……、聞こえておるのう……。恐らく北条氏政は、大殿の死を確信するまで動かぬじやろつ……。何しろ五年前には、我が武田勢に城を囲まれ隨分と肝を冷やしておるからな……」

もはや、返事の出来ない双葉に向かつて、浮穴媛が話し続ける……。

「今、氏政は迷っているはずじゃ……。甲斐の虎と恐れられた大殿が、はたして、そう簡単に死ぬものなのか？ これもまた、武田の策略ではなかろうか？ とな……」

喋りながらも浮穴媛は、双葉の体をたたみ続け、今やそれは、一尺四方ほどの肉の塊になっていた。

「それで良い……、疑い続けておれば良いのじや……。若殿様が御大将として相応しい力量をお持ちになるまで、北条氏政は、穴熊のようにも小田原城に籠もつて大人しくしておれば良い……」

浮穴媛が話し終えた時、そこには異様な物体があつた……。

それが、かつて美しい娘だつたとは誰も思つまい。干からびた肉塊の中程には血走った眼球が見開かれ、依然、艶やかな黒髪だけが風にそよいでいた……。

浮穴媛は双葉の塊を抱え自分の口の高さまで持ち上げると、もはや瞬きすら出来ない彼女の目を見据え、薄桃色の口を歪めてにやりと笑つた……。

「では、双葉よ……。頼んだぞ……」

続く。

第三夜（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

本当は、もっと長いんですがいつたん切れます。

一話につき一人殺そうと思っていたのですが、全五話の予定なので、
一人生き残りそうです。

第四夜（前書き）

『お読みいただく前に』

この小説には、残酷な描写が含まれています。
また15歳未満の方は閲覧できない事になつております。
あらかじめご了承ください。

廃寺の阿弥陀堂は、床板を突き破つて青竹が生えるほどに荒れていた……。

その朽ちた板敷きの中央に、油皿に灯された炎が明々と揺らめいている。

男が六人、灯火を中心に車座になっていた。彼らから放射状に伸びた影は、やがて阿弥陀堂全体を取り巻く深い闇とひとつになる。その暗く淀んだお堂の片隅に、いつの間にか古びた葛籠つづらが置かれている事に、気付いた者はいなかつた……。

「……お頭の蟲が殺されたらしいな」

ひとり大きな影が、地の底から沸き上がるような低い声で言った。風魔一党の大禿おおかむである。この容貌魁偉な忍者は、僧形ながら、戦場を往来する武将のごとき殺伐とした雰囲気を漂わせていた。太く跳ね上がった眉は、彼の気性の荒さを物語っている。

「蟲は斬つても突いても死なぬと聞いておりますが……、やはり、甲斐のくノ一の仕業でしょうか？」

他の五人は、みな鎖帷子を着込んだ上に、暗紅色に統一された上衣、袴、胴締、頭巾で身を包んでいた。

「……であろうな」

大禿は、濁酒の入つた甕かめを側らに引き寄せ、柄杓ですくつては口に流し込んでいた。

「延沢村の川縁で、腹の裂けた女を葬つた土饅頭が見つかっています……。恐らく、奴らの仲間でしょう……」

「ふん……」

大禿は、鼻息を荒くした。

「甲斐のくノ一などは恐れるに足りぬが、何とか、奴らを捕らえて信玄坊主の生死だけは確かめたいところだ……」

「しかし、もし信玄が死んだとあらば、今頃、甲斐の国中が大騒ぎになつておるのでは……？」

「ふふふ……、それよ……。その事を確かめる為、今、お頭が伊吹の鬼童丸に会いにいつてある」

「伊吹の鬼童丸……！？ 鬼童丸と言えば、越後の軒猿のきざるではありますか！」

軒猿とは、越後の戦国大名、上杉謙信が使つ乱波の事である。

「もし、甲斐に変事の兆しがあれば、謙信入道とて黙つてはあるまい。必ず、軒猿どもに事の真相を確かめさせておるはずじゃ……」「しかし……。軒猿どもが我らに協力しますかな……？」

三年前、先代北条氏康の遺言により、氏政は上杉謙信との同盟を破棄し、武田と手を結んでいた。その事により風魔一党は、この軒猿とは敵対関係にあつたのだ……。

大禿は、柄杓ですくつた濁酒をちびりとやつた。

「ふふふ……。俺は政の事はよく分からんが、まあ……敵の敵は味方という事だ……。信玄坊主が世を去れば、我々とて武田に義理立てする理由はなし……。再度、上杉と組めば良いだけの話だ……。ふはははっ！ バカと関東管領は使いようつうやつよ」

頭巾の下から、ぐぐもつた下忍達の含み笑いが漏れた。
暗がりに置かれた葛籠の中から、この会話にじっと耳を傾けている者があろうとは、誰一人知るよしもなかつたが……。

じりじりと鯨油の燃える生臭い煙が立ち上っている……。

「明朝、ふつきよ拵曉とともに三国山の峰越に狼煙のんが上がつたら、俺は、急いで城へ走らねばならん。お前達は、一一之宮さるのみで申阿彌さるあみと落ち合え」大禿が鋭い目つきで一同をぐるりと睨み回した。

「……その時は、武田と戦ですな？」

「そうじゃ……。我が北条は、上杉謙信と再び同盟を結び、南北から甲斐の武田を挟み撃ちにする！」

その時、下忍の一人が頭上をひらひらと舞う金色の蝶を見た。それは、幻のように儂げな姿であつたが、揺れる灯火を淡く反射しながら、きらきらと妖しく煌めいていた……。

しゃん

鈴を振る音がする……。

「……むー！」

風魔一党は、はたと会話を止め、きらついた目を宙に泳がせた。虫の鳴く声が深みを増す……。

しゃん

再び鈴の音がして、彼らの顔が緊張でこわばつた……。

大禿は、音のする方角を指さし下忍達に目配せをした。忍び装束の五人は素早く板壁にへばりつき、物見の格子窓から外の闇を覗つた……。

「ややつ、巫女姿の女が一人おりますぞ！」

しゃん

大禿は、柄杓ですくつた濁酒をぐいっと一気に飲み干した。

「甲斐のくノ一め……。どうして、ここを嗅ぎつけた……？」

下忍達は、互いの顔を見合せ、額（つな）をあつた。

「……妖しい奴だ、油断するな」

そう言つて彼らは、朽ちた阿弥陀堂の扉を押し開け、風の如く漆黒の闇に躍り出た。

刹那、鼓膜を破る爆音が轟いた！

その衝撃は大地を揺るがし、伽藍を構成する建物をかたかたと鳴らした。やがて舞い上がった土砂とともに、吹き飛ばされた下忍の千切れた手足がばらばらと降り注いだ。

「き、気を付けろっ！ 埋め火が仕掛けであるぞ！」

「おのれ、いつの間に！」

埋め火とは、竹で編んだ箱の中にぎつしりと火薬を詰め、火種の入った竹筒とともに埋めておく物で、敵がこれを踏むことにより、火薬に着火して爆発する仕掛けである。

再び爆発音が轟いた。

下忍達の悲鳴が交錯し、白い煙とともに黒色火薬の燃える臭いが辺りに立ち込めた……。

阿弥陀堂の中では、大禿が外の様子を気にするでもなく、依然、灯火の前にどつかりと腰を下ろしたまま柄杓の酒を口に運んでいた。

「飛んで火にいる……くノ一か……ふふふ……」

その時、金色の蝶が彼の視界を横切った……。

蝶はゆっくり彼の頭上を旋回すると、天井の暗がりへとひらひら

舞い上がつていった。それを田で追つていた大禿の顔が驚愕の色を現す。

……梁に女がへばり付いていた。

「お……！」

大禿が気付いた時には、猿のごとく飛び降りた女の右手に光る苦無あらむが眼前に迫つていた。

「むうんっ！」

咄嗟に彼は、それを左手で受け止めた。苦無は、大禿の手の平に根本まで深々と突き刺さつた……。

「ちつ……、受けたか」

野良着姿の若い女が悪態をついた。甲斐の歩き巫女、菖蒲あやめである。彼女は、空いている方の手で懐から棒手裏剣を取り出すと、再び大禿の喉元を狙つて突いた。

「死ね！」

「ふん、小瀬こせな」

大禿は、もう片方の手をかざして菖蒲の攻撃を受け止めた。燻し銀の棒手裏剣は、またも、彼の手の平を刺し貫いたところで止まつた。

奇しくも、己の両手を貫かせて涼しい顔をしているこの大兵の忍者に、さすがの菖蒲も鼻白んだ……。

「くつ、化け物め……」

慌てて飛び退こうとする菖蒲であつたが、その動きは大禿に封じられていた。彼は武器が突き刺さつたままの手で、菖蒲の拳をつかと握りしめたのである。剛毛に覆われた厳つい指が菖蒲の華奢な拳にめりめりと食い込み、彼女の美しい顔が苦痛に歪んだ……。

「ふつふつふ……、よくぞ気配を消してここに忍び込んだものだ……。さて、どうするか……」

大禿の双眸が不気味に光つた。

「「うしてくれようつー」

「ぎやあ……」

大禿は、その怪力で菖蒲の両の拳を握り潰した。ぐしゃりと骨がひしゃげる音がした……。

「あ……ああ……」

菖蒲は、あまりの苦痛に一、二歩後ろによろめいて立ち止まり、茫然自失のまま立ち尽くした。

大禿は、手に刺さった武器を口にくわえて引き抜くと、今度は、その大きな手で菖蒲の細い両肩を掴んだ。

「えいっ！」

「ひぐう……」

「ごりつ」という嫌な音がした。両肩の関節を外された菖蒲は、もはや逃れる気力も失せ、へなへなとその場に座り込んだ……。

「言え、甲斐のくノー！ 昨年、破竹の勢いで三方ヶ原の家康を蹴散らした武田騎馬隊が、突如、三河野田城から反転して甲斐へ引き上げた理由は何だ？」

菖蒲は、弱々しい瞳で大禿を睨み付けたまま黙り込んでいる。途端に、大禿の額にミミズのような血管が浮き上がった。

「ええい、面憎い女だ！」

そう叫ぶと大禿は、力なくへたり込んでいる菖蒲の端正な顎を蹴り上げた。

「ぐうつ……」

菖蒲は、仰向けにひっくり返り、暗い床板に頭を打ち付けて四肢を投げ出した。大禿は、彼女の上にかがみ込むと乱暴な手つきで野良着の前を開いた……。

油皿で燃える鯨油の炎が、ゆらゆらと菖蒲の白い腹や豊かな乳房を照りし出した……。

「ふん……。殺してしまつには、勿体なこよつな良い女だが、……

大禿は、再び立ち上ると濁酒の入った甕を抱え、中身を少しづつ菖蒲の腹に垂らし始めた。どうりと白濁した液体が、菖蒲の白く美しい体を汚していく……。

「素直に言えれば楽に死なせてやる……。言え、信玄は存命か否か?」菖蒲は口を引き結んだまま目を閉じた。液体の降り注ぐ場所が腹から胸へと移つた……。

形の良い豊かな乳房の上で白い液体がぴちゅぴちゅと跳ねる。その、噎せ返るような甘い匂いの液体は、どうどると彼女の首や脇や^腋の上へと流れ落ち、美しい肢体をいつまでも濡^{なぶ}り、汚し続けた……。

次第に彼女の上半身がわななき始める……。

「おのれ、まだ言わぬか……」「……

大禿の目が冷酷な光を帯びた。

「では、末期の酒じや……。ようく味わつて飲むがよい」

彼が甕を持つ位置を変えると、そこから流れ出る濁酒が今度は菖蒲の顔面に注がれ、彼女は苦悶しながら噎せ返つた。

「ぐえつ……いじまつ……げほっげほつ……くつううつ……いじふつ……」

両肩の関節を外され、起き上がる事はおろか身をよじる事も出来ず、菖蒲はどうどろした液体をその顔に浴び続けた。やがてそれは肺へと流れ込み、彼女の相貌は苦痛と恐怖に大きく歪み始めた……。

…。

「くわーん……『じまつ……ひぐりゅう……ぶはあつ……』『じまつ』『じふつ……ぐふるいり』……」

菖蒲の体が激しく痙攣を始める。白い腹がうねうねと波打ち、豊かな乳房が激しく揺れた……。

「行儀の悪い女だ、こぼさずに飲め……」

大禿は、のたうち回る菖蒲を見て、せせら笑つた。

やがて菖蒲は、両足の爪先をぴんと伸ばし、体を震わせながら大きく仰け反つた。

「くわーっ……ぐふるいり……」『じふ……』

そして彼女は、そのまま事切れた……。

大禿はどつかと座り直すと甕を床に置き、菖蒲の顔を覗き込んだ。彼女の死に顔は、苦痛と恐怖で目を見開いたまま凍り付き、鼻と口からはどうりと白い液体が溢れ出ていた……。

「ふん……、素直に喋ればもっと楽に死なせてやつたものを……」

そう言つと大禿は両手で甕を抱え、残つた中身を一気に飲み干した。

「外にもう一人いたな……」

大禿は、空になつた甕を勢いよく放り投げると、足下に置いてあつた薙刀を手にして立ち上がつた。

後方の暗がりで甕の碎け散る音がした……。

阿弥陀堂の外にはいつの間に昇つたものか、睨み付けるような下弦の月が廃寺の屋根をてらてらと光らせていた……。

すでに、五人の下忍達は無惨な屍を野に晒していた……。

黒く焼けただれた者……、こめかみに棒手裏剣が深々と突き刺さつた者……、手足が千切れ飛んだ者……、首の無い者……。五つの死体は、己の血を大地に吸わせながら点々と散らばつていた……。

その死体に囮まれるように、巫女装束の娘が籠に立っていた。甲斐の歩き巫女、浮穴媛である。雅な美しい顔立ちからは、まるで能面のように全ての表情が消え去っていた……。

「……貴様がくノ一の頭か？」

大禿は、薙刀を振りかざして浮穴媛に歩み寄った。

ふふふ……、聞きたいたい事があるのじや。決して樂には死なせんぞ。そう言つて獣じみた双眸を光らせたが、しかし、その歩みはすぐ止まつた。彼の内にある野生の本能が警鐘を鳴らしたのだ。

狂女のような、けたたましい笑い声が闇を引き裂く。
虫の聲がぴたりと止んだ……。

「相模の乱波、風魔の者よ……。その身で受け止めるが良い……。」
我が、瞋恚の炎を……」

幽鬼のようにたたずむ浮穴媛は、その瞳から只ならぬ妖氣を発しながら左右の手を大きく広げた。

やがて祝詞が始まつた。

右の手には十雷居り つちいがづち
左の手には若雷居り わかいがづち
右の足には伏雷居り ふしいがづち

左の足には鳴雷居り

浮穴媛の、むげんぼうよつ夢幻泡影とした五体が眩い光を放ち始める……。

「おお……お……」

大禿は、氣力の全てを振り絞つて一歩を踏み出そうとするが、すぐんだ足は根が生えたように動かない。彼は、全身の皮膚が粟立つのを感じた……。

風がざわつき始める……。

どこから沸き上がったのか、見るからに禍々しい積乱雲が夜空を覆いつくし、時折、雲間を走る稲光が幽冥な下界の景色を地獄絵図のように映し出す。

頭には大雷居り 胸には火雷居り 腹には黒雷居り 陰には拆雷居り

今や浮穴媛の体から溢れ出る光の渦は、翼を広げた金翅鳥のよう

に彼女と重なり、大禿は、その光を直視する事が出来ずに手で遮つ

ていた……。

鈴の様に凜とした声が鳴る。
「并せてハはしらの雷神成り居りき！」

天高く、擂鼓がどろどろと不気味に連打される……。

次の瞬間、黒雲を焼き払つて天より火柱が落ち、轟音とともに大禿の体を貫いた！

「うおーっ！」

大地が震え、土塊が周囲に飛び散つた。

大禿の頭上に落雷したのだ。

彼の足下に生える雑草が、高温に焼かれてぱちぱちと燐くすぶつた……。

やがて、立ち込める白い煙が霧散すると、空を覆っていた黒雲は嘘のようにかき消え、先刻までと同じように月が照り輝いた。月明かりに照らし出された大禿の黒く焼け焦げた屍は、眼球が抜け落ち、鼻、口、耳、その他ありとある穴から沸騰した血が流れ出ていた……。

「…………死は快樂ナヘイであつたろう?」

浮穴媛は、立つたままの姿で絶命した大禿に冷たい一瞥いちべつを投げる
と、その脇を通り抜け暗い阿弥陀堂へと足を踏み入れた……。

闇に、金色の蝶がひらひらと旋回してくる。
その下に壊れた菖蒲ナスカがいた……。

菖蒲の亡骸には、思わず嘆せてしまつような甘い麹の香りが漂つ
ていた。乱れた黒髪、投げ出された四肢、白く豊かな乳房、全てが
ねつとりと白い液体で汚されていた……。

浮穴媛は彼女の側らに歩み寄ると着物の乱れを直し、両手を胸の
上に組ませて呴いた……。

「…………ひと足先に、黄泉で待つがよい」

次に浮穴媛は、阿弥陀堂の隅に置かれた葛籠ハラシを外に運び出した。
蓋を開けて中に入っている物を両手で抱え上げる。それは、異様な
物体だった……。

干からびた肉塊ハラシ……。

その肉塊からは長い黒髪が地へ垂れ、血走った二つの眼球がじつ
とこちらを見据えていた。

「い」苦労であった……

そう言つと浮穴媛は、伽藍の前庭にある池にその肉塊を放り込んだ……。

長い間、手入れもされず草木が覆い被さった古池の淀んだ水面には、一面に蓮の葉が浮いていた。その暗い水面を破つて、ヤゴから脱皮する蜻蛉のよう^{とんぼ}に全裸の娘がゆっくりと立ち上がつた……。
濡れた裸体は月の光を受け、青白く幽艶に光つていた……。

娘は、憐^{れん}しげにうつむいた顔を上げ、濡れ色に光る黒髪を白い乳房の上に貼り付けたまま、血の氣の引いた唇で呟いた。

「明朝、啓明ともに狼煙^{のひし}が上がれば、それは凶兆です……」
「そうか……」

甲斐と相模を隔てる三國山の峻険な頂に、紫色の煙が一直線に天を衝いたのは、それから数刻後のことである……。

続く。

第四夜（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

本当は、美しい巫女が悪い忍者をやつつける話にしたいのですが、
タイトルが『巫女狩り』なので仕方がありません。

次回、最終話です。

最終夜（前書き）

最終話は少し長くなつてしまつました。2つに切分つかなとも思いましたが、全5話と宣言してしまつたので、そのままアップします。ラストの方は、かなりエグいです。残酷描写が苦手な人はご注意ください。なお、15禁となつております。

最終夜

相模の一之宮とは、すなわち川匂神社のかわの事である。

第十一代垂仁天皇の御世に創祀されたこの式台社は、小田原城から見て丑虎のうしとら方角にある事から、北条氏の鬼門を守護する神として崇敬されていた。

永禄四年、鬼がやって來た。

毘沙門天の化身、長尾景虎である。

この鬼神は、関東の諸将をこぞつて引き連れ、十万という大軍で小田原城下に押し寄せた。そして一ヶ月もの間、北条氏康の小田原城を包囲しながら、この間に古河御所を襲い、北条氏康の外孫にあたる足利義氏を追放して兄の藤氏を鎌倉公方に据えた。

この功績により威信を高めた景虎は、上杉姓を継ぎ関東管領となつてゆくのである……。

そして、この戦いの折、川匂神社の社殿は焼かれてしまった……。

「東国ゆづといふは、ほんに物騒な所ですなあ……」

「そうそう、昨日も浜辺に若い女の死体が打ち上げられたそやないか」

「イヤやなあ……。街道脇から海に下つた所にある祠からは、夜な夜な誰のものとも知れぬ念佛が聞こえるそうやで……」

会話をしているのは、京から呼び寄せられた富大工達である。

北条氏政は、一年前からこの川匂神社の復旧工事に取り掛かつていた。小田原の鬼門を守る御祭神が鎮座する神々しい社殿は、ほぼ

焼失する以前の姿を取り戻しつつあった……。

「ところで……、そこの藁葺き門の下に可愛らしい巫女はんが立つてはるが、こここの神人ですやろか？」

「あれは、ほら……、歩き巫女やろ」

「歩き巫女言うたら、加持祈祷しながら諸国を巡つて……ついでに春も売るていう……」

「ほんまか？ そら、ありがたいわあ……。今日の仕事が上がるまであこに居つてくれへんやろか……」

「はつはつは……。そら無理ですやろ。何せ彼女達は気紛れや……」

秋の空高く、槌を打つ音が幾重にも響き渡り、鬱蒼とした鎮守の杜にこだまする。

相模國鎮護の一之富は、はたしてその神力により戦国の鬼を遠ざける事ができるのか……。

川匂神社の表参道を海に向かつて下り、東海道を突つ切つて海岸へと続く小道に分け入ると、そこに古びた祠があつた……。

蛭子神を祀つたこの小社は、一面に浜荻が自生する小高い斜面の途中に、その朽ちかかつた姿を浜から吹き上げる風に晒していた。干からびて白く変色した鳥居には、黒々と鴉^{かじす}が群がり、近寄る者をその鋭い眼光で威嚇していた……。

「遅いな……」

祠の前に網代笠を被つた男が五人、薄汚れた裁着袴^{たっつけ}の裾を潮風にたなびかせていた。

「大禿^{おおかむろ}の奴め……、何してやがるんだ？」

そのうちの一人、頬までびっしり髭に覆われた矮躬の男が、大きな口をきょろつかせながら溜息まじりに言つた。風魔一党的申阿彌である。

「お頭の狼煙のねしが上がりつてから、もうまる一日も経つのによ……」
申阿彌は、浜で拾つてきた流木に腰掛け、顔にまとわりつく蠅を手で払いながら苛立しげに顔をしかめた。

「誰ぞ、城へ走らせましょか？」

他の者は、風魔一党的下忍である。みな一尺足らずの刀を一本だけ腰に差し、腕を組んだまま申阿彌を囲むように立つていた。彼らもまた、苦虫を噛みつぶしたような顔をしている。

「いや……。お頭に、大禿の配下と合流するまでは動くなと言われている」

申阿彌は、不機嫌そうにべつと睡を吐いた。

強烈な悪臭が漂つている……。

下忍の一人が、鳥居のすぐ脇にある草むらを怨めしげに睨んだ。そこには、無造作に敷かれた筵むしろの上に無惨な水死体が折り重なつていた……。

蠅の飛ぶ音がやたらと耳につく……。

水死体は殆ど白骨化していたが、一番上に昨日浜に打ち上げられたばかりのものがあった。今朝から申阿彌達を悩ませている悪臭の正体である……。

「まさか……、邪魔が入ったのではあるまいな」
「甲斐の忍びが潜伏していると聞きますが……」

「ああ……。この前、その仲間を一人殺したよ…………」

言いながら申阿彌は、昨日上がつたばかりの赤黒く腐乱した死体を見た……。

腐敗による瘴氣しょうきが溜まりぱんぱんに膨らんだ下腹の奥には、紛れもない女の印が刻まれていた……。

服装から見て、若い娘のようである。乱世を嘆いて海に身を投げたものか、それとも峠に巣くつ野盗どもに拐かされ、陵辱の果て海に棄てられたものか……。

「きききつ！ あのくノ一、割といい女だつたなあ……」

女の水死体をぼんやり眺めながら思い出し笑いをしていた申阿彌であつたが、不意に真顔になつた……。

「……うん？」

彼は、片方の眉をぴくりと吊り上げた。

「如何いかがしました……？」

下忍の問いかけには答えず、申阿彌はやおら立ち上がり、水死体の山に近づいた……。

「……な、何を！？」

狼狽する下忍をよそに、申阿彌は折り重なつた水死体をじつと見つめる。

「おい……。これは、何だ？」

申阿彌が指差す先には、奇妙な物があつた……。

それは干からびた肉の塊で、大きさは牛の頭ほどであったが、何より奇妙なのは、その肉塊からは長く艶やかな黒髪が地に垂れ、中程に埋め込まれた二つの眼球がじつとこちらを睨み付けている事である。

醜悪な景色に融け込んで氣付かなかつたが、他の死体と比べて明らかに異質な存在であつた……。

申阿彌は、じばらくそれを見つめていたが、不意にやりと笑つた。
「こいつ生きてるぜ……」

「ま、まさか……」

「さきさきつー、俺様には分かるんだ」

そう言つと申阿彌は、その肉塊の黒髪を掴んで下忍達の前に放り投げた。

「…………こ、これは面妖な！」

彼らが思わず後退る……。

「おい、油を持つて来い」

申阿彌がにやにやしながら言つ。

やがて、油の入った竹筒を受け取ると、地べたに転がしたものにそれをふり注いだ……。

「いいか……、見てろよ」

申阿彌は、その肉塊の横にしゃがみ込み石を打つて火を付けた。途端に、ぱちぱち音を立てて生臭い煙が立ち上る。

くええええええええ……

それは、声ではなかつた。

風が梢を鳴らすような甲高く、そして乾いた音であつた……。

しかし、申阿彌はそれを見て腹を抱えて笑つた。

「ぎやはやは！ それ見る。こいつ苦しがつてるぜ」

「さ、申阿彌様……。これは？」

「甲斐のくノ一の仕業だ。きやはは！ たぶん式神か……、それとも自分で化けてやがんのか？」

下忍達は、燃え上がる炎と黒煙を固唾を飲んで見守った。

「あ……」

突然、金色の蝶が視界を横切った。

それを田で追つた下忍の一人が、網代笠を落とした……。

いや、そうではない。

落ちたのは、笠を被つたままの首だ……。

続いて、首を失った胴体が鮮血をまき散らしながら、糸の切れた操り人形のようにぐしゃりと崩れた。

申阿彌は、下忍の首が飛ぶ瞬間、光る物が目の前を掠めるのを見た。

「散れ！」

彼がそう叫ぶと同時に、四つの網代笠がふわりと投げ捨てられ、次の瞬間、申阿彌と残る二人の姿はかき消えていた……。

鴉が、ざわざわと哭きながら一斉に飛び立つ。

腐敗臭に血の匂いが混ざり、浜風とともに舞い上がった……。

敵は、どこにいる？

下忍の一人が、祠の後ろに生える松の葉陰に身を隠しながらじっと辺りを窺っていた。首筋を汗が伝つ……。

殘賊強暴横……
ちはやふる

不意に背後で若い女の声がした。

ぎょっとして振り向くと、後方にある老松の一股に分かれた枝に、巫女が両手をゆるりと広げて立っていた。

「あつ」

巫女がにやりと笑う。甲斐の浮穴媛(つきあなひめ)だ。

彼女は、神楽を舞うよつた所作でふわりと白衣の袖を翻すと、軽やかに枝から飛び降りた。

「ま、待て……」

下忍も、慌ててその場から身を躍らせた……が、着地と同時に首と胴が離れ、別々の方向に転がった……。

「いたぞ！」

残る一人の下忍が浮穴媛の姿をみとめ、疾風の「」とく駆け寄る。

一人は走りながら抜刀し、鬼の形相でそれを脇に構えた。

もう一人は、地を蹴つて高く跳躍する。

「逃がさん」

飛び上がった下忍は、片手を大きく振りかぶつて手裏剣を投げ打つた。重たい十字手裏剣が、風を切り裂きながら浮穴媛の華奢(かやしゃ)な姿に吸い込まれてゆく。

「ふん」

浮穴媛は、腰に差した白扇を広げるとふわりと煽いだ。ぱんと乾いた音がして、重たい手裏剣があらぬ方向に弾け飛ぶ。

「死ねえーつ！」

間髪入れず、後方から詰め寄つた下忍が、白刃一閃、浮穴媛の細い胴を薙いだ……。しかし、彼女はゆるりと体を回転させてこれを躲し、下忍の体をふらふらと前に泳がせた。

「おのれ……」

彼は再び体勢を立て直し、さうに踏み込んで猛然と袈裟へ斬り下
げた。

がつと音がして刃先が止まる。

浮穴媛は、折り畳んだ白扇で敵の刃を受け止めていた……。

残賊強暴横ちはやばる……

浮穴媛のもう片方の手元が、きらりと妖しい光を放つ。

「んあ……」

声にならない叫びとともに下忍の体が力なく足下に崩れた。同時に首がごろりと胴から離れ、地べたを大量の血が汚していく……。

「ば……化け物」

最後に残った下忍は、恐怖に顔を引きつらせながら狂つたように棒手裏剣を放つた。

浮穴媛は、再び白扇を広げると神楽を舞うようにひらりひらりと攻撃を躱した。檀紙で束ねた黒髪が生き物のように揺れ動く。

「ぐ、くそつ」

下忍は腰を屈めて抜刀し、眼光鋭く渾身の力を振り絞つて敢然と斬り掛かってきた。

「やあああああ！」

残賊強暴横ちはやばる……

浮穴媛は、ふわりと後ろに跳躍しながら横に一回転した。手元から放たれた光が下忍の襟元を風のように掠める。

「ぐひゅつ……」

下忍の首がぐるぐると宙を舞つた……。

首を失つた体は血の霧を引きながら、それでも五、六歩ほど走り、やがてへなへなと力なく両膝をついて倒れた……。

「はははっ！ 風魔一党の力とは所詮この程度のものか。これでは北条氏政も枕を高くして寝られまい」

浮穴媛は白扇を口に当へ、からからと愉快そうに笑つた。

「ああああっ！ なかなか、やりあるわ……」

一陣の風とともに凄まじい殺氣が走つた。

浮穴媛の表情が途端に険しくなる。彼女は身を低くして、ぐるりと四方を覗つた……。

「面白え得物を使うじゃねえか……」

七、八間ほど離れた斜面に、忽然と申阿彌が立つていた。
蓬髪ほりはつと髭に埋もれた顔には、大きな目が炯々と光を放つていた……。

「手裏剣にしちゃ一寸でかいな」

「ふんつ、これは蛇比禮へみのひれといのじや」

蛇比禮とは、大國主神が須佐能男命の差し向けた蛇を薙ぎ払つた伝説の武器で、饒速日命から物部氏に伝承された十種神宝の一つである。それは、複雑な形をした光り輝く円盤であった。

「ふふふ……、今から貴様にも味わわせてやう」

そう言つて浮穴媛がふわりと舞うと、その手から放たれた光の輪が見る見る申阿彌に迫つていった……。

次の瞬間、甲高い金属音が響き、蛇比禮は放物線を描きながら申阿彌の頭上を越え、遙か後方へ跳ね飛ばされた。彼の分厚い唇がにいつと笑つた……。

「さきさきっ！ 蛇は退治出来ても、この猿には効かねえようだぜ……」

「…………何をした？」

申阿彌の高く構えた右手の先から、ひゅんひゅんと空気を切り裂く音がする。彼の指の周りを何かが旋回していた……。

「そりか……、微塵みじんだな」

浮穴媛が吐き捨てるように言つた。

微塵とは、鉄の輪から放射状に延びた三本の鎖の先に分銅を取り付けたもので、輪の部分に指を通して回転させながら使用する武器である。その威力は、分銅の遠心力も相まって敵の頭蓋を粉碎するほどに強力であった。

不意に申阿彌が走り出した。

迅はやい！

忍者は基本的に横に走る。

暗殺、闇討ちを常とする彼らは、敵と正面からぶつかり合つ事を嫌うのだ。右に飛び、左に走り、ときには数歩後退しながら旋風のごとき軽妙さで敵との距離を詰める。この走りが更に加速すると敵の目に残像が焼き付き、あたかも複数を相手にしているかのような錯覚を引き起こさせる事がある。

浮穴媛には、申阿彌が三人に見えた……。

「くつ、やりおるわ……」

彼女も緋袴の裾をひるがえして疾駆しが、あつといつ間に追いすがられ、強力な微塵による洗礼を受ける事になる。凶暴な分銅がぶうんと唸りをあげて、何度も浮穴媛の美しい顔を掠め、白衣の袖が何ヶ所もざつくりと裂けた。

やがて、追い詰められた浮穴媛が砂地に足を取られ躊躇めいた瞬間を、申阿彌は逃さなかつた。

「食らえい！」

微塵が申阿彌の手を離れ、強力に回転しながら浮穴媛に襲い掛かる。鋼鉄の鎖は蛇のように彼女の足に絡みつき、つんのめつて斜面を「じるじる」転がる間も、その華奢な足に巻き付いて離れなかつた。

⋮

「きききつ！ 召し捕つたりいーつ」

申阿彌は、嬉々として砂地に横たわる浮穴媛に駆け寄つた。

「さあて……。捕らえた兎をどう料理するか」

そう言つて彼女を覗き込んだ途端、申阿彌の顔から笑みが消えた

⋮

「あれ……？」

そこに転がっていたのは、浮穴媛と等身大の藁人形であつたのだ。

「ちくしょう、ひとがた人形だ！」

鎮は安なり 人の陽氣を魂じんといふ 魂は運なり

浮穴媛の声がする。

申阿彌は、きょろきょろと辺りを見回した……。

言ひは離遊の運魂を招きて 身体の中府に鎮む 故に鎮魂といふ

「あんな所にいやがる！」

先刻まで申阿彌がいた斜面の上に、浮穴媛の飄々とした姿があつた。

彼女は、両手を組み合わせて鎮魂印を結んでいたが、やがてその手の平を申阿彌に向かた。次第に掌中に光の珠が輝き出す…。

天の火氣あめのほのけ…… 地の水氣つちのみずのけ……

「何だ……ありやあ……？」

鈴のように凜とした声が響く。

「やあつー！」

同時に、彼女の手から勢いよく光の珠が放出され、一直線に申阿彌の体に吸い込まれていった。一瞬の出来事である…。

「あ……あれ……？」

申阿彌は、光の珠が入り込んだ胸の辺りを不思議そうに撫で回した。

「一体どうした……？」

次に顔を上げて浮穴媛を見る…。

ぱんつ！

血煙と肉片を四方にまき散らしながら、申阿彌の体が木つ端微塵に消し飛んだ。

「ふふふ……、相模の土となるがよい」

浮穴媛の周りを金色に輝く蝶がひらひらと飛び回っていた……。

遠く、相模の海の水平線を秋の陽射しが、まるで魚の鱗のようになぎらぎらと輝かせていた。

雲の流れが、徐々に速度を増している……。

海を臨む蛭子神の小社には、相変わらず浜風が吹き上げていた。その側らに、力なくかがみ込む浮穴媛の悵然とした姿があった……。

「双葉よ……。酷い目に合わせてしまつたの」

彼女の前には、黒く焼けただれた双葉の塊があつた。黒髪は全て焼け落ち、二つの眼球はすでに生命の光を失っていた……。

「許せよ……」

その時、浮穴媛の細い肩がびくんと震えた。

「彼女はゆつくつと立ち上がりながら言った。

「妾の後ろを取るとは……見事じゃ……風魔小太郎！」

いつの間に現れたものか、浮穴媛の後ろには風魔小太郎の姿があつた。

ちりちりと火縄の燃える音がする……。

「ふん……。種子島か……」

言い終わらぬうちに耳をつんざく発砲音が響き渡り、浮穴媛は衝撃で一二、三歩前によろめいた。

右肘から下が無くなっていた……。

しかし、彼女は苦痛に悶えるどころか、嬉々として言い放った。
「はーはははっ！ 愚かなり風魔小太郎。この至近距離で狙いを外すとは、焼きが回つたか？」

彼女は、肘から大量の血を垂らしながらも、壯絶な形相でゆつくりと風魔小太郎の方を振り向いた。

「次は貴様の番じゃ……。その手足引きちぎってくれよう」

しかし、風魔小太郎の姿を見た途端、彼女の表情は凍りついた。

「……何だ、それは！？」

再び、発砲音が轟く。

浮穴媛の左肘から下が消し飛び、血煙が舞い上がった。その反動で大きく仰け反つた彼女は、それでも踏み留まつて風魔小太郎の顔を睨みつけた……。

「そ、それは、鉄砲か……？」

「ふふふ……。甲斐の山奥に住んでおつては、見た事もなかろう」
風魔小太郎は、異様な形をした鉄砲を構えていた。

それは、銃底を軸に六本の銃身を束ねて一つにしたもので、六つの銃口が輪になつて一斉に浮穴媛の方に向けられていた……。

「こいつはな……、大枚はたいて雑賀鉄砲衆から譲り受けた六連輪廻銃というもののじや……。いちいち弾込めする事なく、六発の弾丸を続けて発射する事ができる」

そう言い終わった途端、六連輪廻銃が三度目の火を吹いた。弾丸は浮穴媛の右足に命中し、彼女はもんどり打つて地べたに転がつた。右膝から下が消えていた……。

「お、おのれ……風魔小太郎……」

血の氣の引いた唇がわなわなと震えた。風魔小太郎はその顔を見下ろしながらせら笑った。

「お前は、得体の知れぬ術を使うからな……。まずは、うんと痛めつけておかねば」

風魔小太郎の視界を金色の蝶が横切った。

途端に彼の手が素早く動きそれを捕らえる。握りつぶされた蝶は、紙片と化し浮穴媛の胸の上にぽとりと落ちた……。

「甲斐の躰躅ヶ崎館にいる信玄は影武者であると、伊吹の鬼童丸が言つておつた……」

「……鬼童丸だ？」

「越後の軒猿^{じや}……。奴には、一度見た人間の顔をその黒子の位置まで正確に記憶する能力がある……、そいつが影武者であると太鼓判を押したのじや」

「ふふふ……、詮無^{せん}い事を……」

「そうやって、白を切り続けるがよい」

四度目の発砲音が天地を震わせると、浮穴媛はそのまま氣を失つた……。

秋の空は、刻一刻とその表情を変える。

それは無常な戦国の世を、克明に与し取つてているかのようでもあつた……。

さつきまで穏やかだった海には、いつしかうねうねと高い波が渦巻き、墨を流したような黒雲が空を覆い始めていた……。

気が付くと、浮穴媛は祠の中に運び込まれていた。

衣服は脱がされ、失った四肢の先には血止めの紐が固く縛りつけられていた……。

「気が付いたか……」

薄暗い祠の中に寂然と座す、風魔小太郎の黒い影があつた。

「何故、殺さぬ……？」

彼女の問いには答へず、風魔小太郎はしみじみと言つた。

「お前は、本当に美しい……。もっと他の生き方はなかつたのか？」

「あつはつは！ 何を戯けた事を！」

浮穴媛は、土氣色の顔を歪めて笑つた。

「妾は戦火に滅ぼされた村で、焼け死んだ女の腹から生まれた子じや！ 人買いの手から手へと渡り、甲斐國巫女頭領、望月千代女様に拾われたとき思つたぞ……六道などない……この戦乱の世こそが即ち、修羅であり、畜生であり、餓鬼であり、地獄なのだ……とな」

風魔小太郎は、ふうっと大きく溜息をついた。

「まあよい……、お前と禪問答しても始まらぬわ」

彼はゆっくりと立ち上がり、鷹のように怜俐な目を細めた。

「ところで、お前……」

にやりと笑う。

「生娘だな？」

「な、何を……？」

浮穴媛の顔に狼狽の色が現れた。

風魔小太郎は、彼女の上に身を屈めると、くんくんと下腹の匂いを嗅いだ。

「ふつふつふ、男を知らずに逝かすのも哀れじや……。ひとつ、お

前を女にしてやれや……」

「何をする気じゃーー？」

風魔小太郎は、突然、浮穴媛の横に嘔吐した。その吐瀉物は、毒々しい虫色をした巨大な虫だつた……。

「こいつは、お前が殺した松虫の弟で、月虫といつ……。是非にも兄の仇を討ちたいとこいつので、こいく連れてきたのじや」

その奇怪な芋虫は、重たい体をざるざると引きずりながら、膝から先を失つた、浮穴媛の足元へと這い寄つた……。

「ああ、月虫や……。憎き兄の仇じや……、存分に喰らうがよい」

月虫は、さうと哭くと彼女の白い太腿^{ふじもも}の間に徐々にその凶暴な体を埋めていった……。

「んわあ！」

浮穴媛の四肢のない体が大きく仰け反つた。目を大きく見開き、洞穴のように開いた口からは上ずつた声が漏れた。

「お、おお……おのれ……おのれ風魔小太……小太……こ

……！」おおおおおお

手足を失つた体を激しくよじる姿は、この上もなく凄惨かつ妖艶であった。それ自体が一匹の虫のようでもあり、悪鬼に捕らわれもがき苦しむ天女のようでもあった。その瞳は、恐怖と苦痛に怯えながらも抗い難い恍惚感に濡れ輝いていた……。

「おのれ……風うま小太ろおおお……おの……おの……ふつ魔こた

……こた郎……お……お……あああ……」

この、瀕死で横たわる女体の一體ごとに、このような精気が残されていったのか…。

反り返つた白い首の曲線は、つすべりと汗ばみ、細い肩を結ぶ華奢な鎖骨が小刻みに震える……。そして、未発達の乳房は次第にその大きさと固さを増し、その先をつんと尖らせながら激しく揺れ動いた……。

その下に浮き上がったしなやかな肋骨の影や、綺麗にくびれた腰がびくんびくんと激しく波打ち始めると、彼女の喘息声の調子がだんだんと狂氣をおびてくる……。

白くたおやかな腹に、筋肉の線が浮き上がる程に身をよじり、激しく首を振るたびに艶やかな黒髪が生き物のようこうしきねうねと揺れ動いた……。

風魔小太郎は、そんな様子を感情のない瞳で見下ろしていったが、やがて浮穴媛の体が激しく痙攣し始めると、長く地へ垂れた髪をつまみながら、ふふふと含み笑いをした。

浮穴媛は、涙と涎に濡れた顔を狂ったように振りながら、短い手足をばたつかせた。
よだれ

やがて弓なりに仰け反つていた体はぐつたりと全ての力を失い、睫毛の長い切れ長の瞳は、そのまま静かに閉じられ一度と開かなかつた……。

「ふ……昇天したか」

風魔小太郎は、どつかりと座り直し、浮穴媛の腹の中にいる虫に呼びかけた。

「月虫や……、如何いかがであった？ 処女の体はこの上もなく美味であるつ……？」

につこり笑いかけるが、返事はない……。

「……これ、月虫？」

げらげらげらげらげらげらげら……！

突如、死んだと思っていた浮穴媛がけたたましく笑つた！ 風魔小太郎は、驚愕のあまり目を皿のようにしてその顔に見入つた……。

「月虫は死んだわ！」

浮穴媛の目がかつと見開かれた。

「妾わらわの腹に、禍々しき蟲の精を宿してなあ！」

げらげらげらげらげらげらげら……！

「おおおつー！」

風魔小太郎は、恐怖に仰け反つた。浮穴媛の両目が妖魔のゴトく黄金色に輝いていたのである。

「あな嬉しやなあ、風魔小太郎おお……妾はらわは孕はらわんだぞ……禍々しき蟲の子らをなあつー！」

風魔小太郎は尻餅をついたまま、ずるづると後退った。彼の視線は恐怖のために忙しく揺れ動き、全身の皮膚が粟立っていた……。

「あな嬉しやなあ、風魔小太郎お……妾は産み落とすぞ……恐怖と厄の子らをなあつ！」

そう叫んだ途端、浮穴媛の股間から鮮血が飛び散り、続いてぬらぬらと光る粘膜の糸を引きながら、奇怪な節足動物がずるずる這い出してきた。一匹、二匹、三匹……。その数はたちまち増え、風魔小太郎は足下にまとわりつく蟲を払いのけながら悲鳴を上げた。

「はあーはははっ！ 妾は占い当てたぞお！ 北条は滅ぶ！ 卑しき出血の将に討たれてなあ！」

風魔小太郎は、祠の壁に背をもたせ掛けながら、ずりすりと起き上がつた。袴を黒く小便が濡らしている。蟲の数は、今や祠の床を黒く覆い尽くすほどに増殖していた……。

「はあーはははっ！ 妾は占い当てたぞお！ 風魔一党は下賤の徒に成り下がる！ そして、その首を刑場に晒すのじゃあつ！」

祠の扉がばたんと開いた。いつの間にか外には強い突風が吹き荒れ、入り口から勢いよく流れ込んで風魔小太郎の逆立つた総髪をなびかせた。

「はあーはははっ！ 妾は占い当てたぞ……」

そこまで言い掛けたとき、突然、割れんばかりの発砲音が祠の内部を搖るがせた。

浮穴媛の首が消えた……。

その側らには、震える手で六連輪廻銃を握りしめる風魔小太郎の姿があつた。

「お、おのれ……甲斐のくノ一め……。あ、ああ……どうしたもののか……。相模の地に厄の種が広がつてしまつ……」

彼は狂つたように足下を這う蟲を踏みつぶした。しかし、その禍々しい蟲は次から次へと壁や床板の隙間をぐぐり抜け、外の世界へと、肥沃で豊かな相模の大地へと這い出していった……。

「ああ……ああ……。北条は……相模の国は滅ぶのか……」

風魔小太郎は、夢遊病者のよつな足取りで、砂嵐が吹き荒れる海岸へと下つた。

最後の発砲音は、「じ「じ「じ」と激しく荒れ狂う波の音にかき消された。

その後、風魔小太郎の姿を見た者はいない……。

雷鳴が轟き、やがて滝のような雨が大地を打ち始めた……。その水煙に霞む祠の下から黒い影がゆっくりと起き上がつた……。

足柄峠に鬼女が出るという噂が立つたのは、この凄惨を極めた戦いから、ややあっての事である。

その姿は、全身黒く焼けただれ、頭髪は全て焼け落ちていたといふ……。

落葉が雪のように降り注ぐ季節の話であった……。

忍法夜話／巫女狩り 完

（――この物語は創作であり、歴史的資料に綿密に取材したものではありません）

あとがき

高校に通っていた頃、クラスメイトに潔癖症（医師やカウンセラーではないので断定は出来ませんが）の女子がいました。彼女は、何かに触れるたびに手を洗い、また消毒液のスプレーで念入りに殺菌していました。僕は、どうしてそこまで清潔にするのだろう？と、いつも不思議に思っていましたが、ある時、ふと考えました。あの子が心の奥底で本当に望んでいるのは、手を清める事ではなく、泥の中に手を突っ込んでこねくり回す事なのではないだろうか……、嫌悪とは憧憬の裏返しなのでは……と。

人は、たとえ理性が否定しても、やはり恐い物や残酷な物を見てみたいという衝動にかられてしまいます。何故でしょう？ それは残酷な物を求める欲求が、性衝動とカタルシスを共有しているからだと私は考えます。イタリアン・ホラーに代表される所謂エログロとこうものが、ひとつのジャンルとして確立されているのもその表

れです。また、かつての文学少年達が、江戸川乱歩の小説に単なる推理小説以上の熱狂と興奮をおぼえたのは、やはりそこに思春期の性的好奇心を満たしてくれる何かが存在したからではないでしょうか。残酷と性……。この二つに共通している事は、どちらからも生命というものを強烈に感じるという事です。これを『臭い物には蓋的な発想だけで人々の目から遠ざけてしまう事は、返つて良い結果を生まないのではじょうか。（もちろん、違法な物や未成年者的人格形成に支障をきたすような物は取り締まらねばなりませんが）こことこを取り違えると、私達は死ぬまで心の中を消毒液で殺菌し続ける事になるのでは……、そんな事をふと思った次第であります。（平成二〇年四月 関伊琢司）

最終夜（後書き）

最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。

この小説は、『春エロス2008』という企画に参加するためだけに書いたもので、ジャンルはあくまでもホラーです。そのため歴史を説明するような文章はなるべく省きました。

第1話はかなり昔に書いたもので、取りあえずそれを投稿してしまってから残りのストーリーを考えました。その為、全体を通して物語に整合性がなく時間経過もあやふやとなってしましましたが、自分としては、とてもいい勉強になつたと思っております。

エロスを間接的に表現する為、残虐性に置き換えてみたのですが、いささか調子に乗りすぎたきらいがあります。今後、この分野で突っ走る気はありませんが、機会があれば、また挑戦してみたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9219d/>

忍法夜話／巫女狩り

2010年10月12日03時31分発行